

生活科における教師力

—「振り返り」を通して命を育む活動の分析から—

幼児教育学科 善 野 八千子

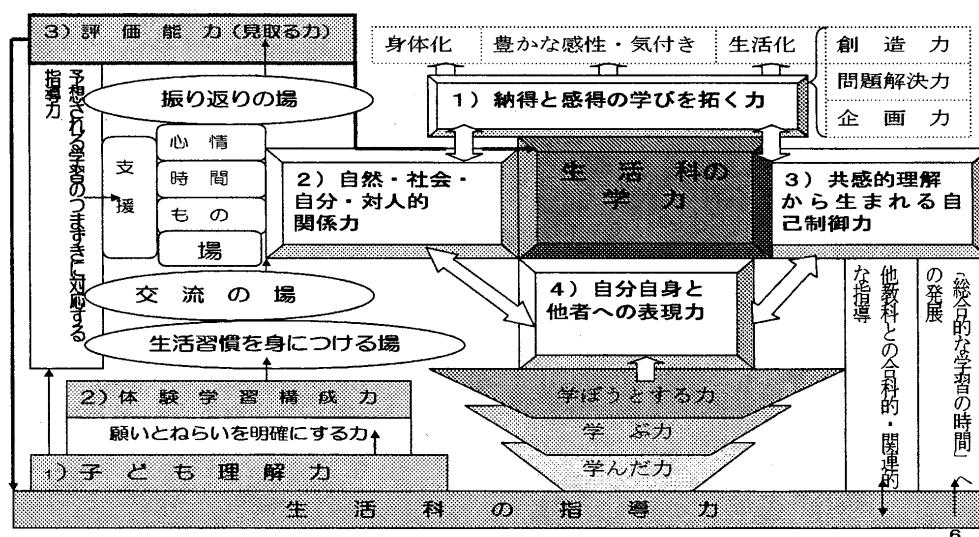
第1章 はじめに

現在、急速かつ広範にわたる教育改革が進行している。平成17年10月26日「中央教育審議会」新しい時代の義務教育を創造する（答申）において、「我々の願いは子どもたちがよく学びよく遊び、心身ともに健やかに育つことである。そのために、質の高い教師が教える学校、生き生きと活気あふれる学校を実現したい。学校の教育力すなわち（学校力）を強化し、教師力を強化し、それを通じて、子どもたちの「人間力」を豊かに育てることが改革の目標である。」と新しい義務教育の姿が示された。

教育改革に関しては絶えず「三つの質」（教員の質・カリキュラムの質・経営の質）が問われる。なかでも教員の質、すなわち「求められる教師力」はこれまで以上に重要課題となっている。

生活科は、全面実施から13年が経過し、次回の学習指導要領改定への動きが始まっている。育ちと学びの連続を保障するための生活科における教師力とは何であろうか。ここでは、「振り返り」を通して命を育む活動となる生活科の最終単元の活動分析を手がかりにして、「生活科における教師力」とは何かを明らかにする事を研究の目的とする。

生活科に求められる質の高い教師（教師力）とは、「学び続ける子どもを育む教師力」「子どもと保護者からゆるぎない信頼を得る教師力」であり、本研究において、その具体的課題は、プランニングスキル、ティーチングスキル、マネジメントスキルを高めることではないかと考えた。



(図1) 生活科の学力・指導力 (2004.8 善野)

金子書房教科の学力指導力P53

筆者はこれまでの自らの実践や実践研究等から、「生活科の指導力」について前掲の図にまとめている（図1）。しかし、根拠となる単元分析を行なった結果のまとめとなっていないことが課題であった。そこで、今回の実践分析と考察にあたっては、第2学年の最終単元「自分たんけん『わたしの成長ものがたり』」から、生活科に求められる教師力とは何かを探ることとした。

その分析単元設定の理由は、以下の2点である。

まず1点目に、先行研究「生活科で育った学力についての調査研究」（野田敦敬 他11名せいかつ&そうごう第12号、2005.2）に着目したことである。

そこには、心に残る生活科の活動調査〔調査対象：小3・小6、中3、高3の2544名〕において、ワースト1は、「1年間の振り返り」であり、ワースト3は「自分の成長の振り返り」（順位は筆者が現行の学習指導要領に置き換えた）という結果が示されている。

これらの心に残りにくいとされる振り返り単元の実際を分析することで「生活科における教師力」を明らかにしようとするものである。

2点目には、年間を通して「いのち」をテーマに行った学習の集大成として、家庭の教育力への働きかけが顕著となる本単元を分析することが重要だと考えたからである。

①振り返ることの意味を見出し、育ちの連続を見取る単元であること

②命を育み自尊感情を育てる単元であること

③家庭の教育力への働きかけや家庭との連携が明らかにされる単元であること

以上3点を検討単元の根拠として、第2学年最終単元の実践を分析することとした。

第2章 授業の実践と考察

1. 実践研究の方法

（1）対象 和泉市立南池田小学校 第2学年1組（34名） 担任 上田晋郎 教諭

（2）時期 平成18年1月26日～18年3月12日

（3）手続き

授業は担任である上田晋郎教諭が実践した。また、本研究にかかる分析・考察は授業者からの聴き取りや記録をもとに筆者が行なった。

（4）単元の概要

単元名 自分たんけん「私の成長ものがたり」（全18時間）

内容項目⑧のねらい

多くの人々の支えにより、自分がおおきくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えた事など分かり、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもつとともに、これからの成長への願いをもって、意欲的に生活できるようにする。

昨今の多様な家族のあり様や配慮すべき家庭事情から、本単元の指導については、ややもすると十分指導しない傾向や保護者との信頼構築が十分できないために忌避する傾向にあると思われる。

生活科の最終単元である本単元のねらいは、自分の成長を振り返る中で「自分自身のいのち」の尊さや重さについて気づき、さらなる成長へのステップを踏み出すことである。本単元は「2年生になってできるようになったこと」と「生まれてから今までの自分たんけん」の2本の柱からなっている。これまでの学習と、この2本の柱が、相互に連鎖しながら「自分は大切な存在なんだ」「いろんな人に支えられて育ってきたんだ」「もっと大きくなっていきたい」という思いをもつことができるよう単元を構成している。

2. 授業の実際と考察

(1) 事例分析—プランニングスキル—

育ちの連続を見取る単元構想にあたって、どのようなプランニングスキルが必要となっているかについて考察を試みた。

授業者は指導計画の作成にあたり、第2学年2学期までの生活科学習について振り返り、単元構想を以下のイメージ図に整理している。

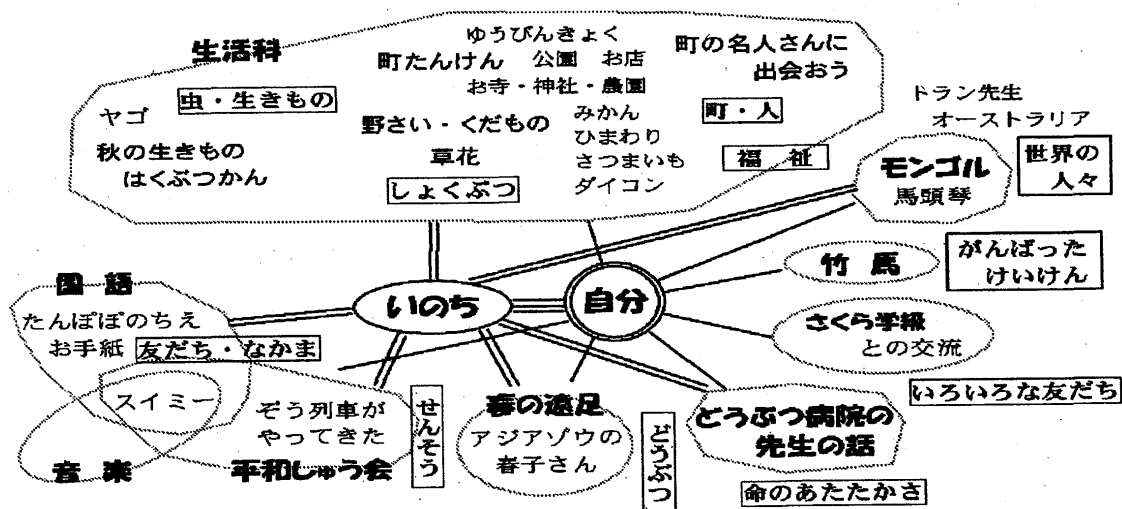


図2 授業者による単元構想イメージ図

2年生の生活科では、1年間『いのち』をキーワードに学習を展開してきた。

春の「1年生と仲よくなりたいな」や「ヤゴ見つけ」、「アジアゾウの春子さんに会いにいこう」から端を発した学校あんないやヨモギだんご作り、七夕交流会、秋の遠足といった「友だちと力と心をあわせること」を軸にした学習もそうであるし、野さいの栽培やミカンの木の観察や収穫といった「植物とのかかわり」、春子ゾウさんや動物病院の先生のお話といった「動物とのかかわり」はもちろん、運動会にむけてみんなが竹馬にのれることをめざした「がんばること」や「はげましあうこと」も『いのち』をふくらませる大切な学習として取り上げてきた。1年生や保育園のとの関わり以外にも「町たんけん」や「名人たんけん」、「さくら学級との交流」「モンゴル留学生との出会い」での「いろんな人との出会い」もまた『いのち』についての大きな学びにつながっていった。とりわけ、秋の虫や生きもので教室がいっぱいになった「秋の生きもの発表会」の取り組みは、子どもたちに『いのち』そのものに触れ、『いのち』について学ぶ絶好の機会であった。

『わたしの成長ものがたり』は、こうした1年間の『いのち』の学習の集大成の単元である。さまざまないのちとの関わりの中で、それぞれに成長してきた子どもたちが、さいごに自分自身のいのちと向きあい、その重さや大切さに気づくことをねらいとしている。そしてその中で、自尊感情をはぐくみ、育ててくれた人たちへの感謝の念をもち、もっとよりよく育っていきたいという思いを抱かせていきたいという願いをもって取り組んでいきたい。(授業者の指導計画段階の振り返りと願い)

また、『わたしの成長ものがたり』の単元に関連して、他教科や領域では以下のような活動をつなげようとしている。

【特活】：養護教諭の話「赤ちゃんはこうしてできる」を聴くことやビデオ視聴、実際の新生児と同じ重さの人形を抱く体験等を設定する。

【国語】：『おへそってなあに』を投げ入れ教材にして学習し、おへそが果たしてきた役割を読解し、科学的な知識を共有させる。

【道徳】：4月から『記ねん日カード』の取り組みをしている。できるようになったことや、がんばれたことを、ほくのわたしの大切な記念日として記録し、3学期の道徳では、その『記ねん日カード』の整理と充実を図る。また、3月には社会見学で和泉ボランティア市民プラザ「アイあいロビー」に訪れ、障害をもつ人について学習するが、ここで体験や気づきが、本単元での『いのち』の学習をさらに深めることとなっていくと思われる。

こうした他教科他領域の取り組みが、生活科『わたしの成長ものがたり』のベースになっている。

プランニング段階では、イメージ図による単元構想の明確化と他教科、他領域、他単元とのつながりを整理して単元を構想することが重要といえよう。

(2) 事例分析—ティーチングスキル—

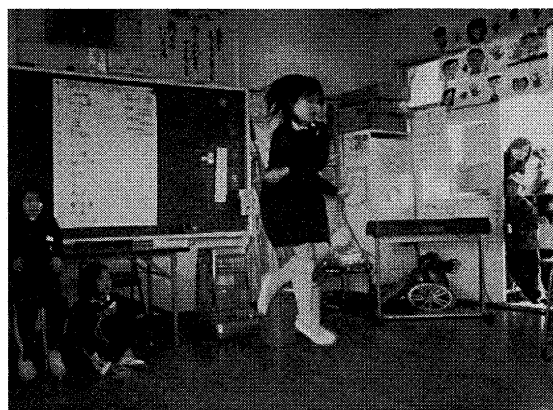
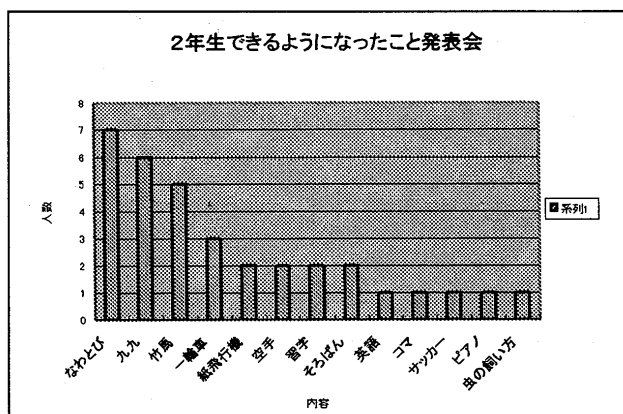
自尊感情を高め自分の命に気付く働きかけとしてどのようなティーチングスキルが必要となっているかについて考察を試みた。

①2年生になってできるようになったこと発表会

2年生の振り返りは、「2年生ももうすぐおわりに近づいてきたね。この1年間、いろんなことができるようになったり、いろんなことをがんばったりして、たくさん成長することができた。さあ、どんなことができるようになっただろう」と授業者の問いかけで始まっている。

竹馬や一輪車、なわとび、鉄棒など体育での技能が上達したことや、かけ算の九九や音読・暗唱・漢字など教科学習面での技能の上達を挙げる児童が多かったが、「虫がさわれるようになった」「野さいの育て方がわかった」「1年生にやさしくできた」など生活科での成果を挙げる児童もいた。また「友だちがたくさんできた」「みんなをまとめられるようになった」など、内面的な成長も意見として挙げられている。この話し合いをうけて、ワークシート1で「一番とくいなこと」「一番すきなこと」「一番がんばったこと」を書き、その中から「みんなに見てもらいたいこと」を選び「その理由」と「発表の方法」を書かせている。また、「みんなに見てもらいたいこと」を選ぶにあたっては、「すごく上手にできること」よりも「2年生でこんなことをがんばってきたんだよ」ということを見てもらおうと呼びかけ学年最後の学習参観に、『2年生になってできるようになったこと発表会』を行っている。

〔表1 2年生になってできるようになったこと発表会〕



発表会では、みんなが固唾をのむような姿勢でお互いの発表を見合った。声が聞こえにくいときには息をひそめ、驚いたときには声を挙げて驚き、感心したときには惜しみない賞賛のことばと拍手を送りあった。

なわとびで100回跳びを披露したD児とE児。100回跳びというのは前とびを100回、引っかかることなく跳ぶことを指している。体育の時間には、引っかかってしまうと失格でその場に座らなければいけない。二人は、その100回跳びをクリアするのに随分と時間がかかった子どもたちである。100回跳びが始まり、見ている子ども達はみんな「いーち、にーい、さーん…」と声を合わせて数え始めた。50回を越えた頃、一人の子が引っかかってしまった。「しまった」という顔をしたが、なお大きな声で数え続けている。だれも「あーあ」と言わない。その声に励まされるように、続けて飛び始めた。しばらくして、もう一人も引っかかった。また数える声が大きくなった。その子もまたすぐなわをにぎり直して跳び始めた。「98、99…ひゃーく！」二人は真っ赤な顔で跳び終えた。みんな力いっぱい拍手をした。二人は、満足そうな顔を見あわせて、ほほえみあった。(授業者による「2年生できるようになったこと発表会」の記録)

授業者はこの発表会の位置付けを、「誰よりも得意なこと、上手なことを自慢しあう会」とはしていない。「苦手だったことを、がんばってここまでできるようになったんだよ」と披露しあう会と位置付けている。発表の前に「なぜこれを見てもらいたいのか」を一言ずつ発表させることによって、自分の不安と重ねながら、友だちにもうまくいってほしいと願う心を育てている。発表後のワークシートには「〇〇ちゃんは本当は一りん車がにが手だったのに、れんしゅうして、教室のはしからはしまで行けることができて、びっくりしました」「(算数の苦手な)△△ちゃんが8の段の逆を言ったのでびっくりした。最後まで言えるかボクもドキドキした」といった文が多く見られる。この日の『2年生になってできるようになったこと発表会』は、社会的承認を得ながら自己達成感や有能感を得る場となっている。

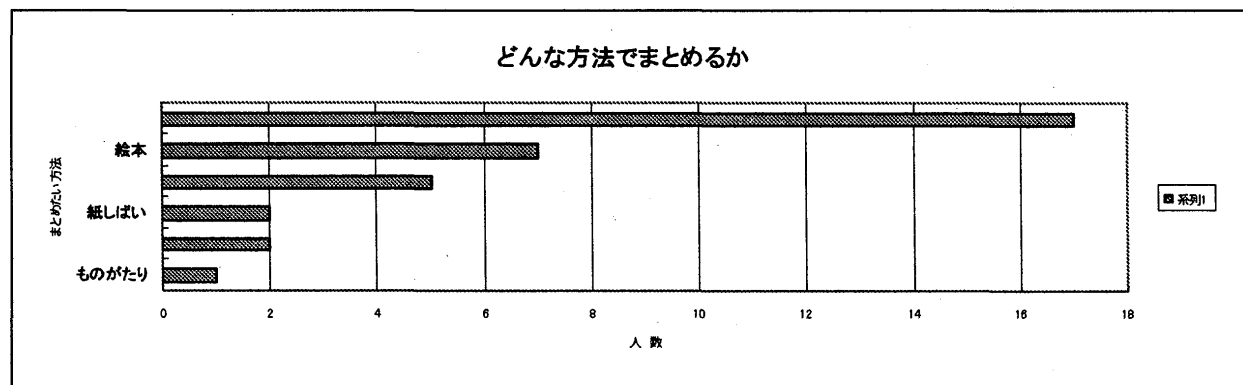
〔表2 評価「2年生になってできるようになったこと発表会」〕

	氏名	発表内容	理 由	意欲	自己評価	コメント	友の発表への関心	備考
14	KS	コマ	一年の時はできなかったから	AA	A	手に乗りかけた	A	司会
15	NS	なわとび	百回跳びが苦手だった	A	A		A	
16	KS	そろばん	上手だから	A	B		B	
17	AT	なわとび	綾跳びが安心してできる	A	A		A	
18	MT	なわとび	二重跳び記録伸ばしたい	AA	A		A	司会
19	CT	九九	苦手だったのに今は得意	A	A	いつもよりハキハキ	A	
20	SN	紙飛行機	飛行機博士だから	A	B		A	
21	MN	紙飛行機	今一番楽しいから	A	A	泣いてしまったが	A	
22	TF	九九	九九を劇にしたいから	AA	A		B	
23	YF	九九	名人になれたから	A	A	言い間違わなかった	A	
24	AF	そろばん	算数が苦手だったから	A	A	練習の成果	A	
25	KF	一輪車	空中のり見せたい	A	A		B	

この時点での評価は、「発表内容」「発表の成功性」に主眼をおくのではなく、「発表内容の選択の理由」「自己の成長の振り返り」「発表にむけての取り組みのプロセスと発表の工夫」「発表を通して、自分の成長への実感（自己評価）」「友だちの発表に関心をもち、友だちのがんばりや工夫に気づき」を記録し（表）、総合的に評価をしている。失敗を恐れて、易きに流れようとする児童には「がんばったことをみんなに紹介しようよ。どんなことががんばってきたか考えよう」と再考をうながしている。

②自分たんけん『わたしの成長ものがたり』制作を通して

「2年生になってできるようになったこと発表会」で発表することが決まり、その準備や練習に入る一方で、「2年生になって、とくいなこと、すきなこと、がんばったことはいろいろあるけれど、それって、2年生になってきゅうにできるようになったのかな。いつごろから、どんなふうにして、いろんなことができるようになってきたのだろう。どんなふうに大きくなってきたのだろう」と授業者が問いかけた。1年生のことや、幼稚園保育園の頃のこととはかろうじて覚えているが、その話の中には家の人から口伝えで聞いたことを自分の記憶に置きかえているような発言も聞かれる。子どもたちの発言をうけて「小さいときから今まで、どんなふうに大きくなってきたのかをしらべてみよう。」と呼びかけた。「学校たんけん」「町たんけん」「名人たんけん」と1年生の時から生活科ではいろんなたんけん学習をしてきた、その最後を飾る「自分たんけん」の提案である。「どんなことを調べてみようと思いますか」と発問して、それに対する発言を受けながら、「生まれたときのこと」「赤ちゃんの時のこと」「幼稚園保育園の頃のこと」「小学校入学から今まで」と分類して板書していった。それによって、ひとくちに小さい頃…と大きく括ってしまうのではなく、時系列を追った調べ方をしていくのだということに気づくことができたようだった。（授業者の記録）



〔図3 まとめ方の方法〕

聞きとりの方法については、「〇才の頃のことを調べましょう」というような年令ごとの投げかけはせずに、自分で聞きたい内容や時期について自己決定させている。

記録が残されていないことも考えられる家庭事情を配慮したものである。実際の聞きとりは、幼稚園入園以降にかたよっていたり、ある時期の聞きとりが全くない児童もいる。しかし、自分の覚えていない乳児期や幼少期を聞きとることは、以下の記述のように自分自身への様々な疑問や気づきを喚起するものとなっている。

「初めからできていると思っていたのに、赤ちゃんの頃はできなかったのを知ってふしぎに思った」
「お母さんはたいへんな思いをして産んでくれたのだな」「自分は大切に育てられてきたのだな」
「わたしのなき虫のせいで、お母さんまでないてしまったこともありました。今でもたまに家でなくときがあります。そろそろなくじだいもそつぎようしないと思います」
「赤ちゃんの時は、元気に母にゆうをたくさんので、いつもふとんをけつとばしていたそうです。今はすききらいが多いけど、すききらいしないで、たくさんごはんを食べたいなと思いました」
「1年生の時は、小さかって、ランドセルが歩いているみたいだったと聞いておもしろいと思った。でも今は、ランドセルは歩いていない。今は1年生をつれていってあげているよ」
「ぼくの1さいの時のしん長は77cmです。77cmは、今のぼくの足からおへそより上くらいです。気づいたことは、生まれたときより1年で22cmも大きくなったことです。これは自分で考えました」

以上のように「だからこうしていきたい」「だからもっとこうになりたい」という思いが聞きとりを通して生まれ、成長した自分を誇りに思える考えも見られる。

聞きとりと共に、歩きはじめたころのクツや服、写真や、生まれたときの手形足形、母子手帳のコピー、はじめてかいた絵や字が集まり始めている。しかし、写真や絵や手形などはすぐにカラーコピーをとって、『せいちょうものがたり』に貼れるようにして返していたためか、紙媒体のものばかりが集中して集まってきている。『わたしの成長ものがたり』の聞きとり用の用紙は、「聞きたいこと」「だれに聞きますか」「教えてもらったこと・聞いたこと・見せてもらったもの（文で書いても絵にかいてもいいよ）」「教えてもらって、思ったこと、気づいたこと、考えたこと」の4項目からなっている。

一度にたくさん聞きとってくるのではなくて、聞きとりと製作を並行して行えるように、期間としては1ヶ月（時数にして8時間）を設定していた。聞き取り情報を作品化するには、どうしても個人差が出る。1枚分の情報で、絵を入れたり考えを書いたりしてアルバム数ページ分にする児童もいれば、2時間費やしても、1枚も書ききれない児童もいる。絵本や巻き物の体裁にこだわって、なかなか中身が増えていかない児童もいる。毎週、聞きとってきた情報からよいものを取り上げて紹介をし、つぎの聞き取りへの意欲につなげてはきたが、基本的に『成長ものがたり』の製作は個人作業である。

日を追うごとにその作業は淡々としたものになってきた。互いに作品に刺激を受けあえるように「絵本グループ」「アルバムグループ」と机を合わせてグループ形式で作業させるようにしたが、個人作業であることにはかわりはない。「教えてもらって、思ったこと、気づいたこと、考えたこと」も書ける子は書いてくるが、全体的には徐々に書くことが乏しくなってきた。（授業者による記録）

以上のように、授業者は活動の停滞と児童のつまづきを捉えている。その後、単元展開の修正を以下のように行っている。

そこで、作品ができてからしようと思っていた『成長ものがたり発表会』を、作品の完成前に、具体物を見せながら話す「SHOW and TELL」で行うことにした。聞き取りの中ででてきた絵本やおもちゃや写真など思い出の品を見せながら、聞きとってきた内容の中から印象的なことをみんなの前で話すのである。クツや服など、これまでも何点か集まってきてはいたが、全員が持ってきていたわけではなかった。『成長ものがたり発表会』をすることになってから、ぞくぞくと思い出の品物が教室に集まり始めた。

一人につき一つの品物を見せる予定だったが、友達に触発されヒントを得て、あれもこれもと1回では持って帰れないほどの品物をもって来る児童も出てきた。教室にあふれるたくさんの品物は、やや停滞気味だった子どもたちの意欲を再燃させ、聞き取りの枚数も再び増えはじめ、作品に書かれている内容もまたイキイキとしはじめた。

発表会では、赤ちゃんの頃好きだったおもちゃや絵本を見せながら、さまざまなエピソードを発表しあった。模様がすっかりはげてしまったぬいぐるみや、いくつかの鈴がとれてしまったお宮参りで貰ったガラガラなど、その子なりの成長の歴史を感じさせる品物を見ながら、集中して話に聞き入った。

中でも子どもたちの心に残ったのは、「生まれつき心臓に穴が空いていて機械を入れていた」「心臓に穴があって、何度も手術をして入院ばかりしていた」「4ヶ月の時に大けがをして何針も縫わなければいけなかった」「幼稚園の時に左ひざの皿が割れた」という「いのちに関わる話」だった。どの子もそれをおうちの人から聞いたときは「こわかった」と話し、「お父さんお母さんがすごく心配した」「代わってあげたいと願ったそうです」「何日も泣いたそうです」と保護者の思いについても話すことができた。それを聞いたある子が「ぼくのお母さんも、ぼくが赤ちゃんの時、高い熱を出してこわかったって言ってた」と自分に重ね合わせた。「誰だって、小さいときに高い熱を出したり、ケガをしてしまったことがある。言葉をしゃべれない赤ちゃんが苦しんでいるのを見るのは、親としては本当につらい。このまま治らなかったら…と最悪のことを考えてしまうこともあった。」と担任も自分の経験を交えながら話した。

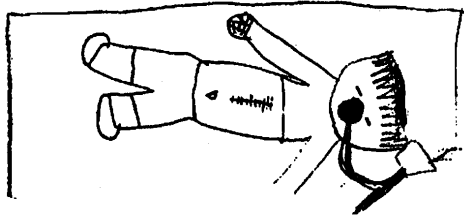
(授業者による記録)

〔表3 私の成長ものがたりの聴き取り〕

『わたしの成長ものがたり』聞き取り

	誕生の頃	乳児期	2・3才	幼保時代	小1	合計枚	評価	備考
1 AR			1	2	1	4		トーマス大好き。事故の場面は怖がる。
2 IS		2		2	1	5		大事に育ててもらった。
3 IM	1	2	1	1		5	AA	体重重く立つのは遅かった。男みたい
12 KM		1	1	1		3		好きなおもちゃの変遷
13 KR	1		1	2	1	5	AA	4才でバイク。もっと大きくなりたい
14 SK	3	3				6	A	ハイハイ、離乳食、
15 SN	1	2		2	1	6	A	幼稚園の作品
16 SK	1	1				2		1枚にまとめて
17 TA	2	2	1	3		8	AA	喘息、天気が悪いと体調を崩す
18 TM	3	2		1	1	7	AA	項目別にしっかり記録
19 TC	1	1	1	1	2	6	AA	父母のたいへんさ、私もいづれ。
27 MH		1	1			2	△	記録は少ない。聞き取りは多。
31 MK	1	1		1		3		身長体重。やんちゃぶり、自転車
32 MK	2	2	2			6	AA	名前・遊び・離乳食・服・大きさ・トイレ
33 YR	1					1		
34 YK	1	2		1		4	A	名前・ねがえり・体重・好き嫌い
合計	37	49	14	27	9	136		

これはかながほいくえんのときに
むねをぶったあとです。



- お母さんやお父さんは、わたしに大きくなってほしいと思って、一生けんめいそだててくれた。わたしも大きくなったら、お母さんみたいになるのかな。これまで元気にすごしてきたのも、お母さんやお父さんのおかげ。これからのわたしは、お母さんのようにがんばれるやさしい子になりたいです。(MK)
- お母さんはぼくを生んだときは「しんどかっただろう」と思いました。でもがんばって生んでくれてよかったです。ぼくが生まれたとき、おちちをのませたりして、たいへんだと思いました。けどここまでそだててくれて、ありがとう。これからも大きくなっていきます。(MY)
- さいごのききとりで、お父さんにきいたら「ぼくは、やさしいぼくだから、お父さんはうれしいよ」と言ってくれて、ぼくはやさしいのかなと気づきました。これからはもっと弟たちにやさしくして、ケンカをしないようにしたいです。(NM)
- わたしは、これからパパが（名前をつけるときに）考えてくれたとおりに、明るくやさしく元気で、何ごとにもまけないわたしになりたいです。こんな名前をつけてもらったのが、とてもうれしいです。ありがとう。(KM)

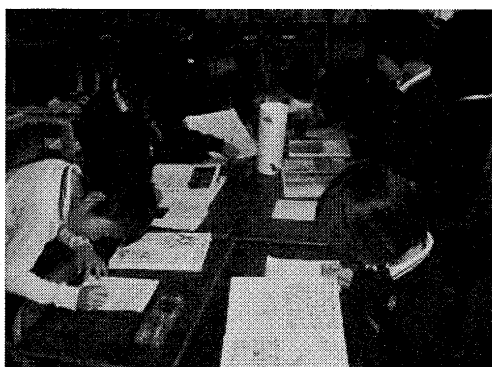
(発表後の子どもの感想)

この日を境に、『成長ものがたり』の内容に、明らかな変化が現れている。発表会までは「育ててくれた人への感謝」が作品中に表れていたのは34人中7人（約20%）だったのが、23人（約68%）に急増している。「育ててもらって当たり前」という態度ではなく「おうちの人の愛情に応えたい」という思いが、その作品からあふれてくるようになっていることが伺える。

③『わたしの成長ものがたり』自己評価・相互評価を通して

『成長ものがたり発表会』の後も、「みんなに見せてあげたい」「先生に写真を撮ってもらって『成長ものがたり』にのせたい」と、思い出の品は増えつづけ、意欲を新たにした子どもたちの『成長ものがたり』はその厚みを増している。できあがった作品には、「記ねん日カード」を加え、4月に書いた「2年生のめあてと手形」に「2年生でがんばったことと手形足形」を加え、「大きくなったわたしの今」と「おとなになったら」を加えて完成させている。

このことは、「成長ものがたり」の完成のみを目的にするのではなく、制作を通して2年生の1年間に振り返らせ自尊感情を高め、保護者の支えに対する気づきを深める子どもの「過去を現在に、そして・未来へとつなぐ」、育ちの連続を保障する教師力に他ならない。



④『わたしの成長ものがたり』聞きとりの評価を通して

〔表4 評価 「わたしの成長ものがたり」の聞きとり〕

		『わたしの成長ものがたり』							
		聞きとった 内容を活か しているか	絵や写真の 点数	成長につい ての気づき考 え	仕上げて いるか	感謝の気持 ち	感謝の気持ち 2 (発表会後)	自己評価	評 価
18	TM	◎	16	○	◎	○	◎	◎	A
19	TC	◎	3	◎	○	◎	◎	○	A
20	NS	◎	8	○	○	△	○	○	B
21	NM	◎	7	○	○	△	△	◎	A
22	FT	○	18	○	○	○	○	◎	B
23	FY	◎	8	○	△	△	△	◎	B
24	FA	◎	38	○	△	○	○	◎	A
25	FK	◎	12	△	△	△	△	△	B'
26	MK	◎	21	◎	○	◎	◎	○	A
27	MH	△	5	○	▲	△	○	○	B'
28	MY	○	7	○	△	△	○	○	B
29	MS	◎	5	○	○	△	○	△	B

児童の中には4週間（生活科としては8単位時間、4回）以上の聞きとりの機会に対して、聞きとり結果がわずか1枚という児童もいる。しかしそこには、祖父母が頭を寄せ合って聞かせてくれたのであろう、断片的にならざるを得ない小さい頃の思い出がびっしりと書かれてありそれ以上を望むことはできなかった。しかし、その聞きとった話を児童は余すところなく作品に活かし、写真も12点（祖父が焼き増しをして持参させたもの）も持ってきて、自分の成長について考えることができていた。（授業者の記録）

作品の評価は、聞きとりの枚数の量ではなく、「作品そのもの」「聞きとった情報を十分に活かしているか」「作品作りの過程で、自らの成長について考えたり気づいたりできているか」「育ててくれた人の思いに気づき、感謝の気持ちをもっているか」などを観点に挙げ、評価を行っている事が分かる。

生活科の評価は点数ではなく、授業者の主観が入らざるを得ない。それだけに、評価はきめ細やかでなくてはならない。それがこまめできめ細やかな支援や指導に直接つながっている。作品は持ち帰って保護者からの感想を得て、その翌日「展示形式」で互いに見せ合う場を設定している。また、作品の横に別紙を用意し、友だちの『成長ものがたり』を読んだ感想を書きあうことにより、相互評価の場としている。これらの他者評価も「友だちのかんそう」として、『成長ものがたり』の1ページを占めている。この後、ワークシートで自己評価を行い、「どんなまとめ方をしたか」「なぜそのまとめ方にしたのか」「どんなところをくふうしたか」「気に入っているところ、直したいところ」「聞きとりをふりかえって」という項目で、『成長ものがたり』の製作全体を振り返らせている。

（3）事例分析——マネジメントスキル——

家庭の教育力への働きかけや家庭との連携が明らかにされるためには、家庭への情報発信と協力依頼について考察を試みる。

①単元の始まり

2年生では、この1年間『いのち』をテーマに学習を進めてきました。野菜のいのちも、虫のいのちも、動物のいのちも、人のいのちと変わらない大切な一つしかない『いのち』だということ。友だちを大切にすることも、いろんな人に出会うことも、苦手だったことをがんばってやり遂げることも、自分の好きなことにイキイキと取り組むことも、ぜんぶ自分の『いのち』をふくらませることになるということ。生活科の最後の学習として『わたしの成長ものがたり』に取り組みたいと思っています。2年生の1年間にできるようになったことをふり振り返り、成長を喜びあう学習から、「わたしたちは、どんなふうに成長してきたのだろう」と思いをめぐらせ、「町たんけん」ならぬ「自分たんけん」をしていこうという学習です。自分が育ってきた過程に、自分の知らない（おぼえていない）さまざまなできごとがあったことや、いろんな人に支えられて愛されて生きてきたこと、その時には語られなかった保護者の思いがあったことなどに気づいた子どもたちは、きっと胸をおどらせ、目をかがやかせて学習に取り組むことでしょう。「自分の成長」に気づき、「育ててくれた人たちの思い」に気づくことによって、子どもたちはより一層自分を好きになり、自分に自信を持ち、もっとよりよく生きようとする気もちや態度を育んでいってほしい。いろんないのちとの関わりの中で、自分のいのちもふくらんできたのだということに気づいてほしいというのが、この単元のねらいです。この学習は、ご家庭のご協力がなければ、とうていなりたちません。子どもたちの質問に答えていただいたり、乳幼児の頃のものを見せてあげていただいたり、場合によっては小さい頃に関わっていた人との橋渡しをしていただいたり、大切な思い出の品をお借りしたり、いろいろな面でご協力をいただくことになるでしょう。たいへんご面倒だとは思いますが、どうか一人ひとりの子どもが「自分ってかけがえのない大切な存在なんだ」という気もちをもてるよう、ご協力をお願いします。調べてくる内容によっては、ご家庭のプライバシーに関わることもあろうかと考えられます。また「〇歳の頃のことは触れたくない」ということもあるかも知れません。そこで画一的な調べ方はせず、子どもたちが調べたいことを調べてくるような方法で学習を進めていきます。子どもたちの聞き取ってきた内容については、十分な配慮をしたいと思っておりますので、ご理解ご協力をお願いいたします。

（授業者から家庭への通信より部分抜粋）

家庭の教育力と特に関連が深い活動については、タイムリーな時期の働きかけが必要である。

単元の始まりと終了時について考察する。まず学習が始まる前に学級通信で保護者にも理解しやすい表現で、以上のように呼びかけている。単元の始まりに明確にねらいと協力の必要性を保護者に伝えることの重要性は、単元終了時の保護者の感想や評価に結果としても表れている。

②単元終了時の保護者の感想

○久しぶりに赤ちゃんの頃から幼稚園の頃の写真を見ました。あなたはお父さんとお母さんにとって初めての赤ちゃんで、とても大切で一生懸命でした。お母さんは、1歳になるまで毎日、あなたの成長、食事の内容、気持ちなどを書きました。いつかお父さんお母さんと離れ、大好きな人と結婚するとき、この『成長ものがたり』を持って行ってね。本当に大きくなったね。これからもずっとやさしいあなたでいてね。

○大きな病気やけがもなく育ってくれています。これからも姉弟仲良く健康第一に友だちと仲良く遊び素直に育ってほしいです。大好きなこと、夢を見つけて、のんびりでいいから進んでください。ずーっとパパの味方でいてほしいです。

○写真をいっしょに選びながら、お母さんはいろんなことを思い出しました。あなたが生まれて、おうちの中がパッと明るくなった事、病気やケガをしないかとヒヤヒヤした事、子どもの成長の早さに驚かされた事。あなたといっしょにいっぱい笑ったし、あなたの気持ちを思うと、くやしくて悲しくて胸がキュウとなった事もあったなあ。これからも力いっぱい生きてね。お父さんお母さんもあなたに負けないようにがんばらないとね！

○『成長ものがたり』を見せていただいて、子どもの小さかった頃の様子など、家族でも忘れてしまっていた成長の記憶を思い出することができました。子どもが自分の生い立ちを知ること、家族から自分がうけた愛情について、気づいてくれたことが、とてもうれしく思いました。また、2年生になってからの1年間で、こんなにたくさんのことができるようになったことに感動しました。

○あなたといっしょにアルバムを見て写真を選んだり、昔話をしたり、改めてあなたの成長過程にふれる事ができました。家族の皆に愛されて育っているということを感じてもらえたら良いと思います。これからも健康で明るく素直に育ってくれたらと心から願っています。そして、親子共に成長していければと思います。

○成長の様子がとてもよくわかるように書けていると思います。見ているといろんなことが思い出されて、本当に大きくなったなと思い感動しました。記念日カードを見て、2年生の間にいろんなことができて、よくがんばったんだなあと思いました。これからもいろんなことにチャレンジしてほしいです。この『成長ものがたり』をずっとずっと大切にしておいてほしいです。(制作物完了時点での保護者の感想)

*子どもの名前はすべて“あなた”に替えてある。

子どもの自己評価、相互評価に加え、この単元で欠かせないのが「保護者からの評価」である。我が子への愛情を、あらためて確かめ、深めている様子も見取れる。我が子の『成長ものがたり』を読み、さらに保護者の感想を集めた学級通信を読んで、涙を流したという感想が、多く寄せられている。この学習を通して子どもたちが保護者の愛情に気づいたように、保護者にとってもどのような思いで我が子を家族として迎え、今日まで育ててきたのか保護者自身が振り返る有効な機会となっている。

第3章 研究結果の考察

以上、生活科における教師力について、「自分たんけん『成長ものがたり』」の実践を分析してきた。最後に本研究から明らかになった点について、述べることにする。

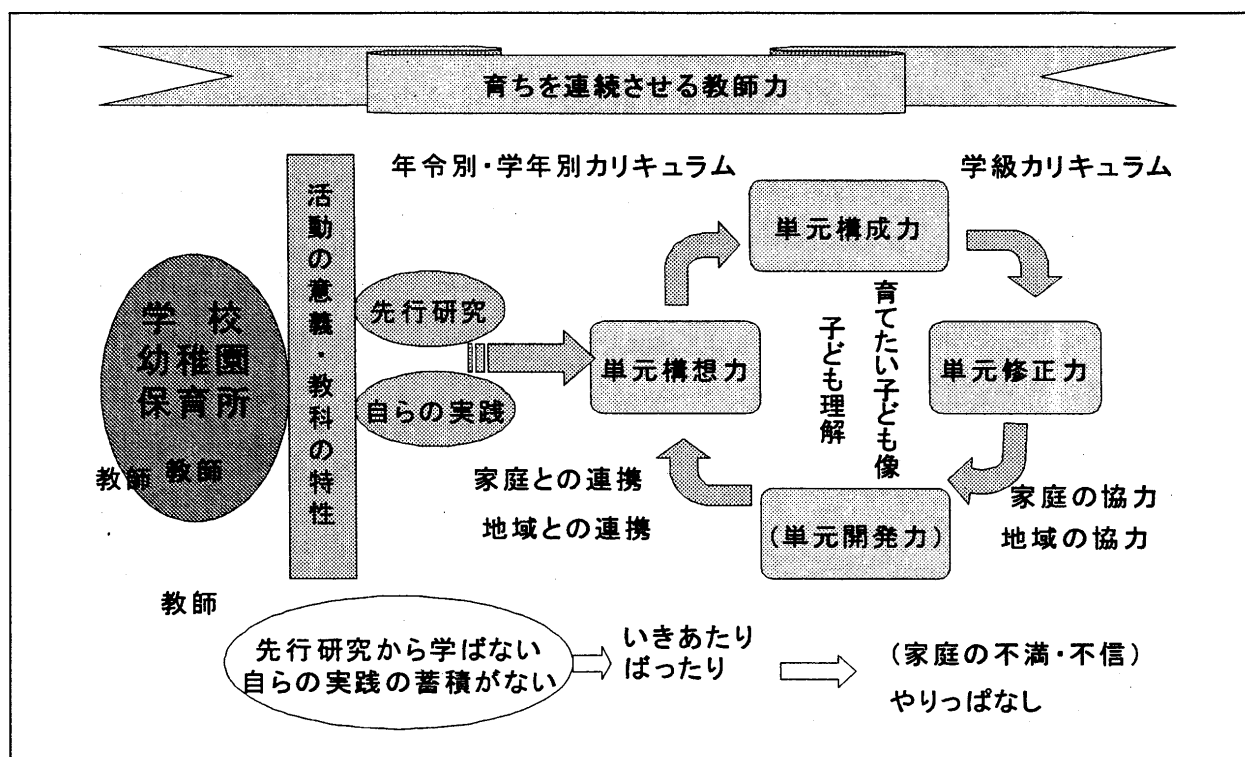
第1に、子ども及び家庭へ働きかける力についてである。

活動を深化させるためには、「単元構想力」「単元構成力」が重要である。単元のプランニング段階で明確なねらいを単元構造図などのイメージに表し、他教科、領域との関連をデザインして、子どもにアプローチしていくことが有効であることが明らかになった。また、子ども一人ひとりとの会話や、聞きとったり調べてきたりしてきた内容を互いに環流していく中で、子どもたちがそれぞれにもっている関心意欲を引き出し深めながら単元を構成していく力が生活科においては重要である。保護者への働きかけは、単元構想の時点でねらいを明確に伝え協力を求めることと共に作品完成時に評価者として共に振り返りに協力を求めることが子どもの育ちを共に考え、結果として子どもの育ちのための連携につながっていく。

第2に子どものつまずきに対応する力である。それは、子どものつまずきを捉え新たな動機付けをする「単元修正力」であり、計画段階にある学年カリキュラムを学級レベルに置き換え、停滞した活動を見直し実態に即して修正していく力であった。

このことは、「成長ものがたり」の完成のみを目的にするのではなく、制作を通して2年生の1年間を振り返らせ自尊感情を高め、保護者の支えに対する気付きを深める子どもの「現在から過去を振り返らせ、そしてその自信を未来へとつなぐ」という、育ちを連続させる教師力に他ならない。子どもの言動や態度及びワークシートや作品等から、詳細に活動記録をとり、個々の意欲や関心を観察する時期とその明確な視点をもつ事が重要である。

以上について、「図4 育ちを連続させる教師力」として表してみた。



〔図4 育ちを連続させる教師力〕

第4章 まとめと今後の課題

これまでの考察結果を整理し、「生活科における教師力」を以下の3点にまとめることができる。

第1に、プランニングスキルである。育ちの連続を見取る単元にあっては、単元全体を見通し「単元構想力」「単元構成品」が重要であった。指導計画の作成段階で、それまでの生活科学習全体について振り返りをもとに単元構想をイメージ図に整理する等して教師自身が明確な願いとねらいをもつことである。

第2に、ティーチングスキルである。「学び続ける子どもを育む教師力」とは、子どもの発達を理解し、学びの軌跡を分析することから子どものつまづきを捉える力である。また、自尊感情を高め自分の命に気付く働きかけとして、子どもの観察や対話による木目細かなカンファレンスをカリキュラム編成に生かす力であることが分かる。それは「単元修正力」として学年カリキュラムを個々の子どもに対応した学級カリキュラムに改善する力とも言えるであろう。

第3に、マネジメントスキルである。ねらいにそった子どもの育ちの連続のためには、家庭への情報発信と協力依頼が大変重要であった。学級経営におけるマネジメント力、また保護者との信頼構築によって家庭の教育力に適切にはたらきかける教師力が求められる。

本研究は、第1学年の単元については実施していない。今後の課題として、幼小の接続期である就学前から小学校生活入門期における教師力の検討が必要である。さらに、多くの教師の関わりからも検証していく必要がある。

【引用文献】

- (1) 小学校学習指導要領解説 生活編(1999.5) 文部省
- (2) 野田敦敬他11名2005.2『生活科で育った学力についての調査研究』「せいかつ&そうごう第12号」(日本生活科・総合的学習教育学会、P100-109)
- (3) 善野八千子1992.3『第8単元大きくなった私』「生活科授業の実践研究2年」永井政直・松浦宏編(文教書院、P195-204)
- (4) 善野八千子2004.2、『生活科の学力と求められる指導力』「教科の学力・指導力」人間教育研究協議会編(金子書房 P50-60)